

ノーモア・ヒバクシャ通信 第50号

2020年3月13日

ホームページ <http://www.kiokuisan.com/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email hironaga8689@gmail.com
郵便振替口座 00110-5-292881
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

- I. 第8回通常総会のご案内 (予告)
- II. 未来につながる被爆の記憶チャリティー・イベントのご案内
- III. 被爆者運動に学び合う学習懇談会＝シリーズ15の報告
- IV. 未来につながる被爆の記憶プロジェクトの報告
- V. 各部会の報告 資料庫部会：春休みの運動史料整理
- VI. 《関連ニュース》「被爆アオギリ」の紙芝居制作
- VII. 【寄稿】ローマ教皇のメッセージと継承センターの役割
- VIII. 《特別報告》ノーモア・ヒバクシャ継承センター設立募金の取り組み

I. 第8回通常総会のご案内 (予告)

新型コロナウイルスの感染拡大が懸念されますが、皆さまにはいかがお過ごしでしょうか。体調にはくれぐれもご留意されますようお願いいたします。

さて、「地球滅亡まで過去最短の100秒」、米科学誌による「終末時計」が核戦争や気候変動の危機への警鐘を鳴らしています。トランプは、「使える核」小型核弾頭搭載のミサイルを潜水艦に実践配備し、さらに2021年会計年度の予算教書でも核兵器の近代化を掲げ、中ロとの核軍拡競争へさらに踏み出しています。こうした動きに対し、核兵器禁止条約発効の早期実現を図り、「ノーモア・ヒバクシャ」の声で核保有国政府を包囲しなければなりません。被爆75年の今年こそ、私たちはその決意を内外に示し、「ノーモア・ヒバクシャ継承センター」の設立とそのための募金活動を大きく前進させる必要があります。第8回通常総会の開催を次のように予告します。

- ◆ 日時 5月23日 (土) 午後1時から4時まで
- ◆ 会場 東京四谷主婦会館 プラザエフ5階会議室
- ◆ 議題

《審議事項》

1. 第1号議案 2019年度事業報告 (案) 承認の件
2. 第2号議案 2019年度決算報告 (案) 承認の件

《報告事項》

1. 2020年度事業計画及び予算
2. 未来につながる被爆の記憶チャリティー・イベント

II. 未来につなぐ被爆の記憶チャリティー・イベントの案内

2020年は、被爆75周年、また平和の祭典、東京オリンピック・パラリンピックの年、大きく“ノーモア・ヒバクシャの声を世界に”アピールします。原爆被害の実相と被爆者の原爆とのたたかひを受けつぎ、これまでの体験記や活動の記録類を整理・保存・普及し人類の未来につなぐ「ノーモア・ヒバクシャ継承センター」を東京に設立するため、そのキャンペーンとしてチャリティー・イベントを開催します。継承センター設立のための6億円募金を広く内外に訴えます。

企画概要を下記にお知らせします。皆さんにはお誘いあわせの上、ふるってご参加くださるようお願いいたします。池辺晋一郎さんをはじめ出演者の方々のボランティア出演、実行委員会団体の熱心なご協力、並びに会員の皆さんのご参加などによって、必ず成功させたいと願っています。チラシを同梱しましたので、ご活用ください。

◆ 日 時 7月21日(火) 午後2時～5時

◆ 会 場 日本青年館ホール(1200名)

◆ 参加費 2,000円(チケット)

◆ プログラム

混声合唱組曲「こわしてはいけない～無言館をうたう」(指揮 池辺晋一郎 ほか)

朗 読 劇 「夏の雲は忘れない」(長内美那子、大原ますみ、山口果林、子どもら)

報告と訴え 映像「声が世界を動かした」(被爆者運動史)、活動紹介と訴え

演 奏 「原爆をゆるすまじ」(ユーゲント・フィルハーモニー)

司 会 「檀ふみ」(イベント全体の進行役)

◆ 主 催 ノーモア・ヒバクシャの声を世界に 実行委員会

実行委員長 池辺晋一郎

参加団体 日本原水爆被害者団体協議会 日本生活協同組合連合会 日本青年団協議会 全国地域婦人団体連絡協議会 全国大学生生活協同組合連合会 東京都生活協同組合連合会 一般社団法人東友会(東京都原爆被害者協議会) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

事務局・問い合わせ 日本青年団協議会(電話03-6452-9025)

III. 被爆者運動に学び合う学習懇談会《シリーズ15》の報告

彼らは何を訴えるのか—被爆50年調査の自由回答

継承する会は1月18日、第15回「被爆者運動に学び合う学習懇談会」を四ツ谷・プラザエフ会議室で開きました。

テーマは「彼らは何を訴えるのか—被爆50年原爆被害者調査(自由回答)の報告—」。「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」(現行法)が制定された翌1995年に日本被団協が実施した「原爆被害者調査」は、この法についての意見などの自由記述回答が未集計のまま残されていました。四半世紀を経た昨年、一橋大学大学院の授業「平和の思想」でその整理・分析にとりくんだ根本雅也さんと受講生12人によってまとめられた報告書

のエッセンスをもとに報告していただきました（参加者は報告者11人を含む35人。内被爆者6人）。

■ 報告のあらまし

今回集計の対象となった50年調査の項目は、問23「援護に関する法律」についての意見／問24 原爆被害への国家補償と核兵器廃絶を求める被爆者運動についての考え方／問25 次世代に伝えたいこと の3つでした。

1. 回答の傾向として特徴的だったのは、全体の1/4以上が「国家補償」に言及していることでした。

「法」の評価をめぐるっては、回答者の圧倒的多数が何らかの不満を述べている。その理由は、(1)死没者を含む〈被爆者の視点〉が欠落している、(2)国家補償が欠落していることへの極めて大きな不満、(3)死没者の扱いに対する不満、(4)特別葬祭給付金をめぐる不平等、など。

回答の時点での平均年齢は68歳。「高齢化」への言及も多く、それは運動への焦りを生み、さらなる運動へと駆り立てる一方で、手遅れや諦めの感情も間見られる。

2. 被爆者運動の評価や運動のすすめかたをめぐるっては、国の戦争責任としての「国家補償」と「核廃絶」という二大要求を土台に、運動の「継続」を求めたものが多くを占めていた。その上で、運動の方法（語り部活動、行政への働きかけ、法改正、平和教育、米国・核保有国への働きかけ、内外世論の喚起など）や担い手（被爆者自身、非被爆者・他の戦災者、海外の人々、二・三世や若者）についての言及がみられる。「被爆50年」という時代背景のもと、体験の風化への危機感から、書き残す、伝えることを強調した回答が目立つ。

3. 次世代に伝えたいこと、では、何を、誰に、どのように伝えるのかは多様だが、伝えたいことは、①平和、②核廃絶・戦争への反対 にくくられる。

現在の状態を「平和」としてそれを守ろうとするものに対し、現存する核兵器や原発、戦争などがなくなる真の「平和」の実現をめざす回答が多数を占める。また、「戦争」と「核」は同時に記されることが多く、被爆者においては、「戦争がなければ原爆もなかった」という考えが前提にあり、核廃絶と反戦が地続きになっていることがうかがわれる。

■ 被爆者のことばから学んだこと

討論に先だって、水俣病や国際政治、沖縄戦の記憶の継承、わだつみ会など、様々なテーマを専攻している受講生のみなさんから、この調査の分析作業をつうじて四半世紀前に書かれた被爆者のことばに向き合うなかで学んだことが縷々語られました。（その一部を紹介します）

○ 全国にこれだけたくさんの被爆者がいる現実を知り、これまで広島・長崎＝被爆者を直結させ過ぎていたと思った。25年の時をへて、被爆者の高齢化、死がいつそう進行していることを痛感し、その後私たちはどう生きていくかを考えさせられた。

○ 祖母が被爆者。広島では聞き流すことも多かったが、「平和」ということばには様々

な意味が含まれており、時代や人によりその実は様々であること。誰が、どんな立場で…と具体的に、真剣に考える機会になった。



○ 被爆者は誰に対して、どんな声をあげているのか。被爆体験は画一的ではなく、求めることもそれぞれ異なることを実感した。それをすべて包括できるのが「平和」だろうが、現実には「平和」の名のもとに戦争が行われてきた危うさもある。誰に対して、何を指しているのか、厳密に考えていくことが重要だと思った。

○ 悲惨な体験は語りえないし、語りたくもないだろうが、どんな経験があっても、語らなければなかったことになってしまう。後世のために重い口を開いて語ってくださったことに、ありがたみをもって向き合っていきたい。

○ 原爆は広島・長崎のこと、教科書に書かれている過去のことと思っていたが、被爆者の苦しみはずっと続いており、平和への希望も未来に続いていることを知った。過去—現在—未来がつながっているなかで、今自分が生きていることを内省した。メディアが報じる特定の日に思い起こすのではなく、たくさんの語りで感じたことを自分の中に刻み、意識の中にもちつづけていきたい。

○ 『広辞苑』には、「平和」とは戦争がなくて世が安穏なこと、と書かれている。が、自分の見える範囲に戦争がなければ「平和」なのか、戦争への設備（軍事施設など）があっても「平和」と言えるのか、といった問題が残る。平和の思想とは、つねに問いつづける、安住しない姿勢と考えてきたが、この作業をつうじて、国家補償の援護法は国が戦争することへの抑止力として国家をしばり、未来の平和を志向していくものであることを知り、法律・制度によって未来の平和を実現していく、という“実践としての「平和の思想」”を学ぶことができた。

■ 討議のなかから

被爆50年調査実施の中心となった田中熙巳さんをはじめとする被団協の関係者、自由記述回答の入力をされた吉川幸次さん、被爆者運動から学んでいる昭和女子大学や立教大学の学生など、多彩な参加者との討議も活発に行われました。そのなかで、核兵器廃絶と国家補償の二大要求は密接不可分な関係にあるとされながら、国家補償の受けとり方は多様であり、被爆者の中にも支援者にもぶれがあるのはなぜだろう、との疑問もありました。

根本さんは、今回の分析では何が書かれているかの傾向は把握できたが、それが何故か、その背景の分析にまでは及ばなかった。今後の課題として考えていきたい、と発言。また、一橋院の「平和の思想」授業科目を創設した責任者でもあり、第11回目の学習懇談会（2018年10月）で、法制定直後に開かれた日本被団協代表者会議における議論を映像を交えて報告した濱谷正晴さんからは、そこでは全国から参集した代表者ら80人が異口同音に国

家補償の重要性について発言していたが、今回の報告書を読むと、それがそこにいた代表だけでなく、もっと裾野にまで生まれ培われてきていたことがよく分かる資料となっている、と指摘されました。

「法」制定時の被爆者たちが交わっていた議論は、残念ながら、その後必ずしも深められてはきたとは言えません。DVD化された映像と今回の報告を活かしながら現行法とその後の運動について検証していくことは、被爆者運動にとってはもちろん、私たちがそこから何を受け継ぐかを考えるためにも、貴重な資料となることでしょう。

《2つの調査に関わるなかで見えてきたもの—根本さんのメールから》

被爆50年調査の自由記述の整理と分析に関わるととてもよかったとあらためて思います。先に一緒にやらせていただいた70年調査を踏まえ、自分の中で色々と見えるものがありました。

その一つが被爆者の戦争否定とその国づくりの思想だったように思います。そんなことを2月15日、長崎大学の核兵器廃絶研究センター（RECNA）の「核廃絶へ 何を継承すべきか—「長崎被爆・戦後史研究会」総括シンポジウム」で話をさせていただきました。

報告のタイトルは、「継承されていないものは何か—原爆被害者調査を中心として」。70年調査で、なぜ被爆者たちの「心にかかっている」ことが戦争だったのか、なぜ彼らは核兵器廃絶以上に「9条厳守」を求めたのか。50年調査で、援護に関する法律に対して「国家補償」の不在を批判したのか。ここに被爆者たちの非戦の思想とその具体的な制度（9条と国家補償）の希求を見て取ることができるように思いました。

その上で、現在、反核と反戦が分離しているのではないかと問題提起をしました。つまり、被爆者が求めていることを核兵器廃絶に押しとどめようとする何かがあるのではないかということでもあります。

この発表は、70年調査、50年調査の分析に関わったことをまとめたものになります。このような考えを持つことができたのも、ふたつの調査に関わらせていただけたおかげです。あらためて感謝申し上げます。

IV. 未来につなぐ被爆の記憶プロジェクトの報告

1/25(土) 主婦会館プラザエフで「未来につなぐ被爆の記憶」理事、ボランティア・スタッフのミーティングを開催しました。未来につなぐ被爆の記憶専用サイトの構築をお願いしている(株)Darwin Educationの田村氏、岡田氏から進行状況の報告とアイコンのデザインについて提案いただきました。また3月に京都で「未来につなぐ被爆の記憶」PJの体験会を開催すること、7月の埼玉戦争展で親子向けの継承の企画に取り組むこと、そして専用サイトに登録されている体験記の英



訳プロジェクトを開始することなどが話し合われました。

(1) 「未来につなぐ被爆の記憶」独自サイト構築の進行状況

2/20、独自サイトのタイトル画面とアイコンが設定されました。以下のURLよりアクセスできます。3月以降、「未来につなぐ被爆の記憶体験会」などで実際に運用しながら、デザインやコンテンツの見直しを行い、より使いやすく見やすいものにしていきます。写真(右)はスマホでの専用サイトの表示。

「未来につなぐ被爆の記憶」専用サイトは以下のQRコード、URLよりアクセスいただけます。

<http://nomore.apllo.io/cesium/>



■専用サイト構築スケジュール

2019/12 独自サイト立ち上げ

2020/02 独自サイトのタイトル、アイコンの設定

2020/03～ 独自サイトを運営しながら、デザインやコンテンツを見直し

2020/07 「未来につなぐ被爆の記憶チャリティー・イベントで紹介



(2) 3/7「未来につなぐ被爆の記憶体験会(京都②)」は延期とさせていただきます

3月7日に開催を予定していた「未来につなぐ被爆の記憶京都体験会」は、立命館大学より講演会、研究会等のイベントについては中止、延期のお願いがあり、延期させていただくこととしました。開催日は改めてご案内いたします。写真は2/18の打ち合わせの様子。京都での体験会はボランティアの大学生が中心になって準備を進めていました。

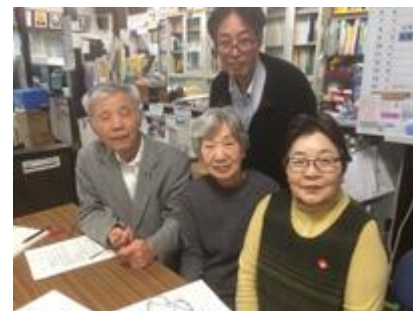


(3) 埼玉戦争展で専用サイトを活用した親子向け企画を準備しています

2/29(土) 南浦和のコーププラザ浦和で7月の埼玉戦争展で取り組む親子企画のミーティングを開催しました。親子2組、学生時代に戦没者の遺骨収集活動に参加した20代の男性、学生時代は平和記念資料館の中高生ピースクラブに所属し被爆体験伝承の活動をしていた若いお母さんなど多彩な方が参加。埼玉県原爆被害者協議会の木内さんに広島での体験をお話いただいた後、茶話会形式で交流しながら、次回の台本作りに向けて子どもたちに伝えるポイントなどを話し合いました。

写真は第1回ミーティングの様子(次ページ左)とご協力いただく埼玉県原爆被害者協議会の木内さんと司会進行を担当したボランティアの松本さん(中央)、2/22に埼玉戦争展の

親子企画の相談に、蕨にある埼玉県原爆被害者協議会（しらさぎ会）の事務所を訪ねた時のひとこま。



V. 各部会の報告

資料庫部会から―春休みの被爆者運動史料整理作業

春休みを利用した恒例の昭和女子大生による被爆者運動史料の整理作業は、2月27日から3月7日までの5日間に、のべ18名が参加して行われました。

新型コロナウイルスの影響が広がるなか、参加できなくなる人もあって、幾分縮小した形にはなりましたが、前半は、一橋の院生が分析作業に使用した被爆50年原爆被害者調査の自由記述回答（コピー）を中心に整理しました。初めて参加した1年生も、25年前に書かれた被爆者の生のことばにふれながら、その願いや要求が実に多様であることに気づいたり、また、被爆者が自分の受けた被害だけでも大変なのに、一般空襲の被害者を気づかっている人もいることに驚いたり。

作業の後半は、段ボールに7箱余りにもなる被爆者運動の写真の整理にとりかかりました。松田忍先生のご助言もいただきながら、山のような写真をいくつかのジャンル（諸会議、中央行動、国際活動、相談事業、地方活動、等々）別に分類。ここから時期別に分け、順次整理して行く大まかな見通しをつけることができました。

VI. 《関連ニュース》 幼児期の平和教育～「被爆アオギリ」の紙芝居制作～

以前、「被爆者問題をみつめる」と題して第3回学習懇談会（2016年3月）でお話をいただいた山手茂先生から、お知らせをいただきました。姪っ子の大庭三枝さんが、「被爆アオギリ」を題材にした紙芝居で読み聞かせの活動を通じて、世界大会で表彰されたというニュースです。

幼児教育や保育を研究する福山市立大学准教授の大庭さんは、同大の前身、福山市立女子短大で保育科講師だった2006年に、ゼミ生とともに「被爆アオギリ」の紙芝居「そばにいるよ～いっしょにあるいていこう」をつくりました。広島で被爆したアオギリの木は引き裂かれながらも生き残り、二世の苗木が世界各地にひろがって平和のメッセージを届

けるという物語。紙芝居は日英仏の3か国語で制作され、学生らの実習として、地元の保育所やフランスの子ども達に、読み聞かせを行ってきました。

紙芝居で幼児期の平和教育に取り組んできた活動や研究が、世界的組織でユネスコの協力機関でもある「OMEP」（世界幼児教育・保育機構）に認められ、「2019 ESDアワード（持続可能な開発のための教育）」を日本人として初めて受賞し、2019年7月にパナマで行われたOMEPの世界大会で表彰されました。

これからの社会を担う若い世代のための平和教育が求められています。幼児期の平和教育の試みのひとつとして貴重な取り組みと思われまます。

VII. 【寄稿】ローマ教皇のメッセージと継承センターの役割

濱住 治郎（日本被団協事務局次長）

ローマ教皇フランシスコは、昨年2019年11月23日から26日まで日本に滞在し、24日に広島平和祈念公園でメッセージを発表して核兵器廃絶を訴えました。「戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外のなにものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、・・未来におけるあらゆる可能性に反します。」「戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるでしょうか」「真の平和とは、非武装の平和以外にありえません。それに、『平和は単に戦争がないことでもなく、…絶えず建設されるべきもの』です。」

これらの言葉はどれも心に響くものであり世界に訴える力を持っていますが、次の言葉は、私たちノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会を進めるものにとって共感できるとも大事な言葉のように思えます。

「私たちは歴史から学ばなければなりません。思いだし、ともに歩み、守ること。この三つは倫理的命令です。…この三つには、平和となる道を切り開く力があります。したがって、現在と将来の世代が、ここで起きた出来事を忘れるようなことがあってはなりません。記憶は、より正義にかない、いっそう兄弟愛にあふれる将来を築くための保証であり起爆剤なのです。すべての人の良心を目覚めさせられる、広がる力のある記憶です。…これからの世代に向かって、言い続ける助けとなる記憶です。二度と繰り返しません、と。だからこそ私たちは、ともに歩むように求められているのです。…希望に心を開きましょう。…」

そして、最後に「原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらぬ！こんな苦しみはもういらぬ！と。私たちの時代に、わたしたちのいるこの世界に、平和がきますように。」と述べました。

原爆にあい生き残った人たちは全国各地で立ち上がり、日本被団協という組織をつくって、「ふたたび被爆者をつくるな」「核兵器なくせ、原爆被害者に国家補償」を長い間求

めてきました。そして、ついに2017年に国連で「核兵器禁止条約」が採択されました、しかし、まだ、世界に14,000発の核兵器があり、新たな開発も進められています。原爆が広島・長崎でなにをもたらしたのか、人間として死ぬことも生きることも許さなかった原爆の「反人間性」を訴え、伝えていかなければなりません。原爆のもたらしたありのままの姿を、被爆者の体験とその後の歩を次の世代に継承していく必要があります。このために、「記憶・たたかい・運動」を継承するセンターが求められています。紙で、映像で、デジタル・データで保存して、それを閲覧したり、話し合い交流したりすることが出来る場をつくりたいと思っています。

今この時代に、私たちは核兵器や戦争にどのように向き合い、どんな未来を子どもたちに残すことが出来るでしょうか。被爆者の体験とたたかいの記録は、それを考え学ぶための宝庫です。「センター」は私たち自身と私たちの子孫のために、非核・平和の世界をつくるための知恵を継承しようとするものです。

ローマ教皇のメッセージの具体化は、「継承センター」の目的と役割につながるように思えるのです。

VIII. 【特別報告】 ノーマア・ヒバクシャ継承センター設立募金の取り組み

継承センター設立募金は2020年1月現在で、累計6,101,491円となりました。引き続き、6億円をめざします。これらの支出は、資料収集・整理・保存事業1,170,805円、未来につなぐ被爆者の記憶プロジェクト585,948円、継承センター設立募金活動186,685円、継承センターWebサイト構築事業1,259,606円、合計3,174,044円で、残高現在は2,927,447円となっています。継承センター設立に向けて前倒しで取り組まれている事業について、この「ノーマア・ヒバクシャ通信」で、順次、解説をしていきます。

(1) 今回は、「デジタル・アーカイブの事業」について解説します。電子図書館として、インターネット上に被爆者のたたかいの記録や資料のデータを収納・保存し、一般の方々がいつでも見ることのできる情報開示の状態をめざします。そのことによって、被爆の実相や体験を継承・普及することにつながるものと考えています。まずは基礎的な作業として、書籍類を含めおよそ一万点に及ぶ膨大な資料を、一つひとつ、意味のある情報開示のためのデータ編集作業、技術的に正確に資料データを写し撮るスキャニング作業、個人情報チェックなど情報開示に適した状態にするマスキング作業などを進めています。より具体的には、①各県被爆者の会の手記・証言集等のデータ化作業を進め、公開をめざします。②被爆者運動資料のデータ・ベースを構築します。項目立てて整理し分類作業をすすめます。③デジタル・アーカイブを活用し、学習や継承活動のプログラムを作り、各地で交流活動をすすめます。④海外向けWebサイトを構築し、情報を発信します。そのため、翻訳等の作業をすすめます。

(2) これらを2023年度までに、順次取り組み、総事業高として2,400万円を想

定しています。今年度は基礎的な作業として、データ編集作業、スキャニング作業、マスキング作業に、合計920,000円を支出しました。そのうちの500,000円は、連合・愛の基金より2019年度中央助成金として寄せられたものです。この場を借りて、お礼と感謝を申し上げます。

まだこの取り組みは始まったばかり、これからが本番です。引き続き、皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

次回は、「資料収集・整理・保存事業」の現状をご報告します。

以上